
手紙

グロ黒馬鹿人間

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

手紙

【Nコード】

N3258M

【作者名】

グロ黒馬鹿人間

【あらすじ】

ある研究の従業員の主人公と実験体の人のとっても短い話です。微妙に残酷な描写があります。

（前書き）

初めて投稿するんであんまりいい話でもないです。
とっても短くて物足りないかもしれません。
こんなものでもよかったです読んでください！

とある場所から」

「実験はこれで終わりですか？」

隣にいる私の後輩が眠そうにそう言った。

それは仕方ないと思う。だって今は午前3時。実験を開始してから約30時間私達は一睡もしてないから眠いのは当然だ。まあ私は慣れたけど。

「そうよ。これで最後。」

私がそう言ったとたん後輩ははあくため息をついた。私は

「なにやっているの。確かにこれで実験は終わりだけど片付けがまだ終わってないわよ。さつさとしないと次の実験体が来ちゃうんだから急ぎなさい。」

「ちよつと待つてくださいよ先輩……。俺マジで眠いんですよ
」

「こんな生活もいずれか慣れるわ。最初はみんなそんなんよ。大変だろうけど急ぎなさい。」

「うううううううううう。……。」

「ほら。急いで。」

私は死体を運び出そうとする。

そのときふとさっきまで彼女が書いていた手紙が私の視界に入る。私はそれを拾い上げ……。

前書き

ワタシは誰なんでしょうか？

それさえ見失ってしまうことがワタシにはよくあります。

いつの間にかワタシの回りにいた人々は消えていっていました。

今、日本にはワタシしかいません。

なぜかというと……。

長い話かも知れませんが。でもワタシはこの紙にすべてを託します。

これを読んでくれる人はいないかもしれませんがそれでもかまわない。なぜかというところの世界は永遠だから・・・ワタシにとっての永遠だから・・・。

第一枚目

この時の私は今より元気のある活発な人だった気がします。

そしてこの世界は今みたいにとよんだものでなくすべてがきらきら光っていてすべてが眩しかった気がします。

その世界が途切れてしまったのはある日の午後。

世界全国で緊急放送が流れました。その放送によるともうすぐこの世界は崩れて消え去っていくんだそうでした。みんなはそれを信じませんでした。でも私はその放送を聞いてそれは本当なんだろうとなんとなく思いました。たぶんみんなも同じことを心のどこかでそれを感じているんじゃないかと思えます。そしてその状態が3日間ぐらい続いてみんなは安心したみたいでした。私はまだ安心はできないのではないかと思いました。そしてその予感2週間後の中するということをおも他のみんなも知らないのです。

2週間たってみんながまつたりしている土曜日の午後の3時くらいに突然それはやってきました。

一瞬世界が真っ白になりそして私が気がついたときはみんななくて私だけが残っていました。

気がついてからあんまり時間がたっていないように思えますがどうなのか？よくわかりません。

さつきから左手が痺れたような感覚があったのですが今ではもうその痛みとかすべてがなくなっていました。どうせみんな消えるのでしょうからこんな書いても意味ないと思います。でもこれが私の遺書がわりですので一応書いてきます。なんとなくこうしているのが好きなんです。本当は一瞬世界が真っ白になった時のことも覚えていたんです。でもその記憶は今ではほとんどゼロにちかいほど忘れてしまいました。きっとこの記憶がゼロになったとき私は消えてるんでしょうか？わからない。たぶん今の日本には私以外誰も

いないんじゃないでしょうか？それを確かめることは私にもできません。これで終わりです。

もうすぐわた

「手紙はここで終わっている。」

「せんぱい。さつさと終わらせましょーよう．．．。」

後輩の声で現実引き戻された。

「はい。じゃあナンバーの確認をしましょう。」

「はい。この人のナンバーは1550番です。」

「あと出身地と名前の確認をしてください。」

「はい．．．。静岡県にお住まいの小野坂零歌おのざかれいさんです。」

麗歌．．．？どこかで聞いたことのある名前．．．．．

．．．．．

「せんぱい。終わらせましょーよ．．．。ヤバイ．．．。睡魔が．．．。」

「もう少しの辛抱よ。」

思い出した。ずっと忘れてた。この子を持ち上げて顔が見えて．．．
．．．思い出した。

これは．．．私の．．．．．

「？先輩？どうかしました？」

「いえ。なんでもない。」

「そうですか．．．．．」

私はいつもの場所へ行く。そこはこの実験の犠牲者の体を焼く場所。いつも午前0時になると火がつく設定になっているため午前0時になるまではここの腐臭は死体が積もっていくたびに酷くなる。新人はこの臭いになれるのに5週間くらいかかる。それほどこの臭いは凄惨ということだ。

そのなかに零歌を捨てる。私の元妹の零歌を．．．．。これで終わりだ。

後輩が

「もう．．．．．帰って．．．．．いい．．．．で．．．．すか？」

と聞いてくる。相当眠いようだ。私は

「もう帰っていいわよ。さよなら。」

「さよ．．．なら。」

後輩が遠ざかって行く。私は死体を捨てた場所に向かって言った。

「ごめんね。」

そうとだけ言って妹の死体があるこの場所から離れる。

これで終わり。本当の終わり。私は自分の住んでいるマンションに戻る。そしてマンションの屋上へ．．．．。

そして．．．．．。

遠くで私の名前を呼ぶ零歌の声を聞いたような気がした。

（後書き）

この作品は読者にとってはつまんないかもしれませんが個人的に始めての投稿に少しどきどきしながら精一杯書きました。

この作品以外にもまた作ろうと思っています。

もしこれで気に入ったのならこれからよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3258m/>

手紙

2010年12月18日17時01分発行